

「栄光の父に祈る」

エペソ人への手紙 1 : 16 - 17

February.20.2022

エペソ人への手紙 1 : 16 - 19 (パワポ)

Preface

エペソ教会の信徒たちの信仰と愛について伝え聞いた使徒パウロは、獄中にあっても喜び、感謝しながら、なお彼らのために祈っていました。

祈りというのは、キリスト者にとって呼吸のようなものです。
私たちの呼吸は、体中に新鮮な空気酸素を血流に乗せて運ばせ、体内を刷新しながら、この肉体の命を保ってくれます。

それと同じように、神との対話である祈りは、正に呼吸です。
祈りをもって、キリスト者は生きた心地がします。
神に生かされているという実感を得ます。

創世記を見ますと、初めに神が人をお造りになった時、「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」とありますが、神こそ、人間のひと呼吸ひと呼吸を生かす命の源なるお方であられ、肉体のみならず、靈をも生かすお方です。

聖書の最後の最後ヨハネの黙示録 22 章を見ますと、父なる神と子羊イエスから流れ出ているいのちの水の川に繋がり根を下ろした木々が出てきますが、まことの神に祈るという行為は、いのちの根源なるお方に繋ることであり、「ああ、生きている、生かされている」という神との繋がりを覚えると同時に、滅びゆくいのちではなく、永遠のいのちを生きているという救いの原点に私たちの視点を導いてくれます。

使徒パウロの祈りを読みますと、パウロ自身自らが神様に繋がっていることの証として祈り、また祈ることをもってその視点が神様へと誘われていることが見えてきます。

さらには、エペソ教会の聖徒たちも、パウロの同じような視点に立てるようになると祈っています

Part One

先程読みました聖書箇所のパウロの祈りの内容を一言で言いますと、「神様を知れるようにしてください」というものです。

「神様がしてくださったこと、神様がなさろうとしておられること、神の御手、神のわざについて分かるようにしてください」と祈ります。

そこには、私たち側の話が一切出てきません。

「私たちがこうしたいので、こう答えてください」という私たちの思いや計画を超えた「神様の御心が分かるようにしてください」と祈ります。

私たち側の話が一切出て来ず、ただただ、神様側のことです。

パウロの祈りだけでなく、聖書に記されている祈りの比重を見てみると、私たちの切迫した思いや願いよりも、神様についての話の方が遥かに多いことが見て取れます。

でも、私たちの暮らしは急を要することが多々ありますので、私たちの大部分の祈りは、神様についての話よりも、私たちについての話の方が圧倒的に多くなります。

もちろん、そのような祈りが悪いとか、いけないということではありません。

詩篇などの祈りを見てみると、今まさに差し迫った問題をもって神様の前に出て来て「主よ、なぜ私をお見捨てになったのですか！　主よ、お許しください！　どうか私を助け出し、私の敵をすべて滅ぼしてください！」というような祈りが沢山出ますが、必ずと言っていいほど、そのすべての祈りの終着点が神様の話に至ります。

始めは、祈り手の切なさ、もどかしさ、切迫した必要性などを羅列していきますが、思いを吐露した後ふと我に返りますと、その祈りが、「私が今祈っていて、この祈りに応えてくださるお方がどなたなのか、父なる神ではないか！」と、神様そのお方そのものへと視点が戻っていきます。

そして過去を振り返り始め、神様が私に何をしてくださったのか、その神様が私の先祖たちにどのようにしてくださったのかと回想しながら、祈り手自身の話から神様の話へと返っていきます。

結局最後には、祈りの対象であられるお方の存在を覚えることが、私の切迫していたはずの必要を凌駕して、圧倒して終わります。

神様の存在そのものが、 “今” を上回っているということを悟るところへと、祈りが導かれていきます。

「今どんなに私が必要としていて、今どんなに差し迫っていたとしても、神様がすべてをご覧になっているだけでなく、そのすべての内容内実をご存じで、神の知恵が私のそれより遥かに深く、この方は全能なるお方だ。

この方は、私のすべてのことを間違いなく益としてくださるお方だ。

私の魂よ！　なぜゆえにお前は、こうも不安がっているのだ！」と結論付けて、最終的に祈りが、「神を知ることをもって」 終わります。

Part Two

祈りは、神を知ることであり、神に会いに行くことです。

神に会いに行くこととは、神様の御旨を、御心を教えていただくことです。

ということは、祈れば祈るほどに、神様が抱いておられるご計画・思い、また神様が喜ばれることに祈り手が同感していく、染められていく結果をもたらします。

イエス様が、「父なる神様は、祈る前からもうすでにあなたの必要なものを知っておられるから、神様の御心がなるよう祈りなさい」と仰りながら、主の祈りを教えてくださいましたが、祈りは、神の思いと擦れ違っている私の思いが、やがて重なり合ってピッタリくっついていく（信仰的）作業でもあるわけです。

「祈りは神様の御思いに染められていくことだ」ということを覚える時、いつも思い出すちょっとほろ苦い思い出があります。

今から23年程のことですが、大学卒業を目前にしていたにもかかわらず、進むべき進路（その時はもう献身することを決めていましたから）、神学校がまだ決まっていない時でした。

日本の神学校は、住み慣れた日本ゆえに、「幾らでも抜け道や逃げ道を作つて、きっと途中で辞めてしまうだろう」という思いから、初めから退路を断つという意味で海外の神学校への進学を考えて、準備していました。

でも、なかなか決まらないのです。

始めは、アメリカの神学校と思っていたのですが、中々道が開かれず困っていました。

韓国の神学校も考えたのですが、「厳し過ぎて、怠惰な僕にはついていけないだろう」という思いから「その選択はない」と考えていました。

「退路を断つ！」なんて言っておきながら、その辺は甘いんです。

で困っていたところ、大学の聖書研究会の仲間でもあり、一緒に土浦めぐみ教会の学生会で信仰生活を送っていた仲のいい友達が「祈ってくれる」と言うんです。

その友達は、その時進路が決まらずに困っていた私のことを良く知つてくれましたし、「献身したい」という思いがあることも知つてくれましたので、「私の意向に沿った祈りを神様にきっと祈ってくれるはずだ」と思つて、二人で一緒に目をつぶつて彼に祈つてもらいました。

すると、祈りの中で事あるごとに「あなたの御旨に適いますなら」とか、「あなたの御旨が成りますように」って祈るんです。

「洪君の献身が、もしあなたの御旨に適いますならば」とか、「洪君が神学校に行くことがあなたの御旨ならば」とか、最後には「洪君の思いではなく、あな

たの御旨が成りますように」と言って、祈りを終えたんです。

彼の祈りを目をつぶって聞きながら、「なんだよ、こいつ、こんな祈りなんかして！ 僕が神学校に行って、牧師なることが嫌なのかなあ？」と、感じてしまいました。

でも、全然違いますね。

間違っているのは私の方で、彼は全然間違っていないんです。

私の思いよりも、遙かに彼の祈りの方が的確だったわけです。

目の前にいる友人の思いにへつらう祈りではなくて、神様の御旨を求める祈りをささげてくれた彼のことを思い出すたびに、なんだか恥ずかしくもあり、申し訳ない気持ちにもなります。

でその彼に、「あの時、あんな祈りをしたよなあ」って言ったことがあるのですが、「そりやそうだよ。僕の祈りが正しくて、洪君の思いが間違っていたんだよ」って、さらりと言ってのけるところなんかは、ちょっと小憎たらしくもあります。

(彼とは今でも仲いいですよ)

Part Three

今日の聖書箇所のパウロの祈りは、「私たちに関する話で埋める祈りから、神様の話でいっぱいに満ちる祈りへと導いてください」という思いに満ちた祈りであります。

クリスチャンであるという理由で囚人扱いを受け、投獄されているという誰よりも切迫した状況にあるにもかかわらず、パウロの祈りを読みますと、神様そのお方その存在を覚えることが、その自分の置かれた切迫した状況を凌駕し、圧倒していることが迫って来ます。

祈りの内容全部を見るまでもなく、祈りの最初の言葉から、神の存在そのものが彼にとって圧倒的であるということが良く表れているのが、見て取れます。

エペソ人への手紙1：17（パワポ）

「（どうか、）私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が」という祈りの最初の言葉から、神の存在そのものに圧倒されていることを喜んでいることが、に良く表れています。

この言葉をもって祈るまでには、パウロも弱い一人間でありますから、牢獄の中で、パウロ自身の切なさ、もどかしさ、切迫した必要性の羅列があったことでしょう。

しかし、それを過ぎて至る所、結局この言葉に至りました。

「主イエス・キリストの神、栄光の父」という言葉です。

「私という人は、まことの唯一の神を父と呼べる立場、地位、特権にある存在である」と、「私と神の関係は、イエス・キリストの贖いゆえに、父と子の関係であり、人間の父は期待に応えてくれないことがあるけれども、父なる神は、至る所決して私の期待を裏切るようなことはされない」という確固たる信仰へと、聖霊の証印ゆえに至らしめられている祈りの言葉が、「主イエス・キリストの神、栄光の父」という言葉です。

イエス様が祈りについて、こんなことを仰ったことがあります。

マタイの福音書7：9－11（パワポ）

このイエス様の言葉が、今パウロには、事実として、実感としてその内にあるんです。

「イエス・キリストゆえに私の神は私の父であられ、私はその子であり、私の神が栄光の父であるならば、その子とされた私は、今も栄光のうちにあるんだ！」と、「父なる神が私に良いものをお与えになるために、“今”があるんだ！」というパウロ自身に与えられた栄光の神の子としての身分の確信が、祈りの初めの言葉「イエス・キリストの神、栄光の父」という言葉に表れているわけです。

神様のことを「栄光の父」と呼ぶのは、将来私たちキリスト者が受け継ぐものがあまりにも栄光に富んでいて、実際にその栄光に入れられること、約束されていることがパウロ自身自覚が出来ていて、

また、パウロに与えられているその自覚がエペソ教会の聖徒たちにも及びますようにと祈ります。

エペソ人への手紙1：18（パワポ）

イエス・キリストを信じる者たちが、すでに与えられている栄光の豊かさを自覚できるようにと祈ります。

「神様のことをただ父と呼べること以上に、栄光の父と呼べる栄光が、子とされたキリスト者たちにも及んでいることを覚えられるように」と祈っています。

それだけでなく、その自覚を、私たちを含めたこの手紙の読み手たちに求めておるわけです。

私たちは、私たちに起こるどんな事でも申し上げ、神様の前に助けを求めることが出来ます。

イザヤ書にヒゼキヤ王の祈りが出てきますが、ヒゼキヤ王が、強国アッシャリアから送られてきた脅しの手紙を持って主の宮に入り、その手紙を広げて、「神様！ この手紙を見てください！ この手紙の内容を見てください！ 今私た

ちは滅びそうになっています！ 私は王として何をどうしていいのかも分かりませんし、何の力もありません！ 「どうにかしてください！」と、脇目も振らず、臣下たちの目も気にせず、ぼろを着て灰をかぶり、王としてのプライドをかなぐり捨てて、神様に祈りました。

私たちも神様に、脇目も振らず、どんな事でも神様に祈ることが出来ます。 「病気を治してください。 合格させてください。 回復をお与えください」と、祈れます。

私たちは、私たちが今直面している被っている困難なこと、健康、お金、子供、家族、仕事どんな問題であれ、「今ここで神様が特別に助けて下さらなければ、潰れてしまう、終わってしまう」と祈れますし、祈ります。

ですが、これが私たちの祈りの最も重要な本論でもなく、それだけのために祈るのでは、祈りの本筋から外れることになります。

祈りは、より重要で、より根本的で、より靈的なものであり、より重大なものです。

端的に言いますと、「まず神の国と神の義を求めなさい。 そうすれば、あなたがたに必要なものはすべて、それに加えて与えられます」とイエス様仰いましたが、

このイエス様が祈りを教えた言葉の真意は、「『神様、神の国と神の義を求めますので、それ以外に私が必要としている物は一切りません』と祈れますか？ 祈れるようになることをわたしは願っていますし、そう祈れるようにわたしがあなたがたを導きます」ということです。

Part Four

「栄光の父」という言葉の中には、「私が今直面している被っている問題ゆえに折れることもないし、滅びることもないし、終わることもないし、失敗をもって結論付けされることもない。 それらの問題は、悲劇ではない」という答えが、もうすでに前提としてある祈りの言葉です。

神様は、ご自身がお選びになり、お呼びになったその子供たちを決して放棄される方ではありません。

これが、すべての答えです。

私たちが祈る時「父なる神様」と祈るのは、私が祈り、私の必要を申し上げる対象が、神であられることを知っているゆえです。

対象もなく、私一人で虚空を見つめるかのようにぶつぶつ何かを唱えたり、私の情熱・熱心を爆発させるのではなく、私の祈りを聞いてくださる人格を持って

おられる方がいて、その方が私の父であって、私がその方を知っているということです。

父なる神様と呼ぶ時は、その方が私にとって、どんな方なのかを知っているということです。

少なくとも私の父であり、私の祈りを聞いてくださるということ、私のためにイエス・キリストを送ってくださり、十字架に架け、死なせることをもってご自身のご榮光を現し、その榮光のうちに榮光の子として、私たちを迎えてくださったというこの知識が、最低限私たちにあるので、祈りを始めることが出来ます。

祈ること自体がもうすでに、（エペソ 1：13, 14節にありますように）聖霊の証印による榮光の信仰的行為です。

だから、クリスチャンが祈ること自体が、もうすでに保証書を持っているということになります。

キリストにある聖徒たちは、決して失敗で終わることが出来ない存在であるという保証です。

どんな状況にあっても、皆さん、私たちの祈りを妨げる方法はありません。たとえ口を閉ざされたとしても、私たちの祈りを止めることは出来ません。

祈れるということは、神様が私たちの行く末を榮光の座へと、神様ご自身がそうすると仰ったそのところへと導かずにはいられない、必ずや成し遂げてみせるということを、私たちに確認させてくださる半端じゃない保証のうちの一つです。

Conclusion

「榮光の父よ」と祈ること自体が、私たちの榮光の身分を、私たち自身に確認させてくれます。

また、期待をもって祈りに出て行く根拠となります。

どんな期待か？

榮光の父を榮光の父と呼べる者として、似つかわしい榮光の場へと導かれ、その榮光の場で拒否されたり取り消されたりすることはないという期待です。

と同時に、この期待を持って祈りに入っていくということは、肉的な世的なものを求めることを下ろして、祈りに出て行くことを知っているということでもあります。

神がどれほどに聖さを求めるお方なのか、その事に対する畏敬の念、信頼、その方が持つておられる権威に対する服従、私がどんなに緊急でも、その方の決済を待たなければならない私の身分、立ち位置を知る姿勢もって祈りに出て行く

ことを知っているということです。

これが、使徒パウロの祈りに表れている衝撃的な視点であり、祈りの方向性であり、祈りの色合いです。

神様にお会いする楽しみ、確かに神様と時間を共にしたという喜び、私たちの日々の暮らしが、聖なる、靈的な、天の栄光の影響下にある暮らしであることを確認できる祈りの生活を、聖靈の導きに従って送らせていただきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：マタイの福音書6：33